

豊かな時代に生きる知恵が未来をひらく

清水 美智子

人間の力がつくりあげた文明が栄枯盛衰を辿ってきた歴史を私たちは学んで知っているが、今の私たちが自身が現在を生きることによって、歴史の担い手になっていくことには気づきにくい。私たちおとなは日々のスケジュールに追われ、時計の刻む時間にしばられているので、目先きのことのみにとらわれてしまう。悠久の時の流れを感受する余裕がない。

だが、時に大きな自然の中に身を委ねて心を休めると、自分につながり自分を超える生命の歴史、地球の歴史的時間を感じるができる。

人間の生活と教育はいつもその国その時代の波にさらされ、社会情勢の変動と相互作用しているが、近年の科学技術の急激な発達による機械化の浸透、マス・メディアの増大や情報化社会、大量消費型社

会の出現等は、人間の生活実感を大きく変えつつある。大地に根ざした生活をしてきた人間の感覚が失われたり歪められたりしている。何のための科学技術か、何のためにこれほどまでに必要かと疑問がわいてくることもあるほどに、通常の人間の生活の必要をこえた需要がつくり出され商品化されている。

情報の洪水についてもそうである。

生活が貧しかった時代には、人間は自分の必要なものを求めるものがはっきりしていて手に入るものは限られていたから、自分の手と足を使い頭を使って工夫し努力することが当然であった。外から与えられるものが乏しいから選択の余地は少なく、ぎりぎりの必要から生活の知恵にみがかがかかっていった。貧しさからの脱却に成功した今日、情報も品物

も機械も雑多な刺激と共に外界にあふれていて、さらに次々と更新開発されていき、必要の域をこえてすらいる。何が自分に必要なのか、どういう目的で何を選ぶか何を拒否するか、主体的な選択がことのほか重要な時代になってきている。生き方そのものの選択につながってくる。豊かな時代はひとりひとりが高度に選択をしていく社会である。多様な可能性の中から自分の責任で、自分の価値判断で選びとって自分の生活をつくっていく。それはぎりぎりの必要からの知恵ではなく、余裕のある状態で選択していく知恵であり、感覚と判断が問われることになる。『価値観の多様化』などという表現がしばしば使われるが、社会全体としては価値観の多様化であっても、個々人にとっては自分の価値判断に基づく選択をしていくことを意味する。自分が生きていく上で何を大切にするか、何かを得ることはその代償に何かを失うことでもあるという認識をもって、ここでは何を優先させどのようなバランスをとっていくか、社会変動の中で自分を見失わずにたえず判断

していかねばならない。豊かさの時代に生きる知恵といってもいい。

このような時代であるからこそ、今育ちゆく子どもたちには、激しい変動に耐え得る心の安定感と柔軟な適応力、周りの風潮に徒らに左右されずに自律的に生きていく力をしっかり培うことが大切だと改めて思う。これすなわち精神の自立、主体的な自己の確立という人間発達の中心的課題であり、結局は時代をこえた普遍的な教育の目標にはかならない。集団指向型の教育ではなく、自己指向型の教育は、自分の内面を培うことにかえて他者の気持や立場を思いやる心が育つものであるし、個の確立なくしては民主主義は衆愚政治に墮してしまうことから見ても重視されねばならない。幼年期には、自然の恵みにとり囲まれ遊び仲間のいる環境で、各自が自分のやりたいことを見つけて心ゆくまで打ちこめる生活が、共感性の高いおとなの配慮で用意されることによって、この方向への確かな歩みをしているのだと思う。

(大阪教育大学)